



Data

監督: 舛田利雄
 原作: 石野径一郎『ひめゆりの塔』
 出演: 吉永小百合/浜田光夫/和泉雅子/二谷英明/高品格/郷鏝治/小高雄二/杉江広太郎(杉山弘太郎)/藤竜也/深江章喜/和田浩治/太田雅子(梶芽衣子)/浜川智子(浜かおる)/三条泰子/笹森みち子/伊藤るり子/渡哲也/乙羽信子/東野英治郎/中村翫右衛門

👁️👁️ みどころ

2019年11月17日~19日の沖縄旅行での、ひめゆりの塔や系数アプテラガマの見学は衝撃だった。

「ひめゆりモノ」は過去4作ある。吉永小百合、和泉雅子、浜田光夫らの日活青春スターが織りなすそれはあくまで日活風だが、それなりに興味深い。戦後75年の今年、「戦争大作」が予定されていないのはなぜ？それでいいの？そんな反省の中、昔のDVDを鑑賞！

『相思樹の歌』は知らないが、本作には『ふるさと』『揚げば尊し』の他、軍歌も『島唄』も登場！また、卒業式や水浴びのシーンには一種の清涼感も。しかし・・・。

沖縄特有のアプテラガマでのひめゆり学徒隊の任務遂行の悲惨さは想像を絶するもの。青酸カリ入り牛乳や手榴弾を含め、今の日本の平和の裏には、彼女たちの悲劇があったことを忘れてはならない、そのことを改めて痛感！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■今年が戦後75年！今年の夏の戦争大作は？■□■

私が大学に入学したのは1967年4月。その当時は、日活は青春映画、東映はヤクザ映画、松竹はメロドラマ、大映は勝新と市川雷蔵の映画を主に撮っていた。それに対して東宝は、加山雄三の青春映画の他、終戦記念日たる8月15日に向けては、毎年戦争映画大作を作っていた。『日本のいちばん長い日』(67年)、『聯合艦隊司令長官山本五十六』(68年)、『日本海大海戦』(69年)、『激動の昭和史 軍閥』(70年)、『激動の昭和史 沖縄決戦』(71年) (『シネマ3』338頁) がそれだ。当時はそんな気骨のある映画製作方針を見せていた(?) 東宝だが、さて、今は・・・？

それはともかく、そんな時代にあって、吉永小百合と浜田光夫が青春映画ではなく、沖

縄のひめゆり部隊の悲劇を描く映画で共演した本作が、1968年9月に公開されていた。中学、高校時代は、自宅から歩いて行ける3本立て55円の映画館で、吉永小百合・浜田光夫コンビの映画をたくさん観ていた私だが、大学に入り、学生運動に没頭するようになると、日活映画の鑑賞はほとんどなくなった。そのため、和泉雅子や渡哲也さらに太田雅子（梶芽衣子）等の「日活青春スター」がオール出演した舛田利雄監督の本作も見逃していたが、2020年1月23日の夜中にこれをDVDで鑑賞。これは、昨年11月17日～19日に沖縄旅行に行き、南部戦跡巡りをする中で、ひめゆりの塔と糸数アブチラガマの見学をしたことを契機にしたもの。その直後から、ずっと持っている本作のDVDを観なければと思っていたが、偶然それが1月23日の夜中に実現したわけだ。

日本は停滞と後退を続けた平成の30年間を終え、2020年という戦後75年の年を迎えたが、さて、今年の夏の戦争映画大作は？まさか、東京2020のオリンピックに浮かれて、1本もそれが作られないということはないと思うのだが・・・。

■□■「ひめゆりモノ」は戦後4本！その時期は？評価は？■□■

広島原爆投下の悲劇を描いた映画は多いが、その代表は関川秀雄監督の『ひろしま』(53年)と、新藤兼人監督の『原爆の子』(52年)。私はこれもDVDで保管しており、何度も観ているが、観るたびに胸が痛くなるのは当然だ。

それに対して、「ひめゆりモノ」は、本作を含めて次の4本がある。

- A 今井正監督『ひめゆりの塔』(1953年)
- B 舛田利雄監督『あゝひめゆりの塔』(1968年)
- C 今井正監督『ひめゆりの塔』(1982年)
- D 神山征二郎監督『ひめゆりの塔』(1995年)

4本の中では、終戦から8年後の1953年に公開されたAが、本土に復帰していないため沖縄での撮影ができなかったにもかかわらず、最も出来が良いと言われている。Cは、今井正監督が沖縄で撮影したリメイク版だが、これはあまり評判がよくないようだ。また、Dも評判はイマイチ。しかし、私が鑑賞した日活の青春スター総出演によるBの出来は？

■□■本作は戦後20年！冒頭はディスコの場面から！■□■

「戦争モノ」は東宝の得意分野で、日活は苦手。また、吉永小百合・浜田光夫コンビも、『若い人』をはじめとする石坂洋次郎原作の戦後の青春モノは得意だが、戦争映画、しかもひめゆり学徒隊の一員として、汚れ役、死んでいく役を演じるのは苦手なはずだ。そう思っていたのに、本作冒頭はディスコで若者たちが踊り狂っているシーンから始まるので、アレレ・・・。たしかに、本作が公開された1968年当時は「ディスコブーム」だったが、なぜ、「ひめゆりモノ」がこんなシーンから始まるの？

これは舛田監督が苦勞して考えた演出で、そこでは特別出演している渡哲也扮する青年が登場する。司会者から、沖縄の歌である『相思樹の歌』をリクエストした理由を聞かれた彼は、「この人たちを見ているうちに思い出したんですよ。同じ世代の若者たち。沖縄師

範の女学生たち。この歌を歌い、そして死んでいったんすよ。」と答えたから面白い。それを受けた司会者がさらに、「つまり今日の時点から、戦争当時のことを考えようとなさるんですね。戦争で死んでいった当時の若者たちと、ここで踊っている若者たち。」と再質問すると、彼は「いやあ。あれから20年。その20年の時間の持つ意味ですよ。」と嘯みしめるように答えていたが、さてその意味は？この青年は一体何者？そしてまた、『相思樹の歌』とは？

■□■導入部は日活色がプンプン！だが、対馬丸沈没以降は？■□■

「ひめゆりモノ」を楽しむためには、最低限、米軍によるサイパン占領（1944年6月）以降に開始された本土空襲の状況や、沖縄上陸作戦に向けた米軍の侵攻状況を、時系列に沿って理解する必要がある。また、米軍の沖縄への上陸は1945年4月1日だが、「その日」に備えて沖縄の日本軍がどんな準備をしてきたのかはもちろん、沖縄師範学校女子部の生徒たちが、なぜ「ひめゆり学徒隊」として従軍することになったのかも、しっかり勉強する必要がある。

それを前提とした上で、本作導入部で展開される1943年夏の運動会の様子は、いかにも日活的な若者像が描かれるので、それはそれとしてしっかり楽しみたい。そこでは、和泉雅子扮する比嘉トミの元気さが目立っているが、吉永小百合扮する与那嶺和子と、浜田光夫扮する西里順一郎の、ちょっとした恋模様も・・・。

しかし、沖縄の子供たちを九州へ疎開させた疎開船「対馬丸」の悲劇が登場してくると、それまで色濃く見せていた日活の青春映画の色は完全になくなり、以降、悲劇一色のストーリーに・・・。

■□■相思樹の他、ふるさと、仰げば尊しも！軍歌も島唄も！■□■

日活の青春映画では、吉永小百合も石原裕次郎も、和泉雅子も山内賢も主題歌を歌っていたが、本作では、冒頭にリクエストされた『相思樹の歌』の他、日本人に最も有名な曲である『ふるさと』と『仰げば尊し』がしっとり歌われるシーケンスが登場するので、それに注目！また、沖縄では『島唄』が有名で、『ひめゆりの塔』（95年）では石嶺聡子の歌った『花』が主題歌にされていたほど。

しかして、本作のクライマックス直前の、ひめゆり学徒隊の隊員たちが一齐に水浴びをするシーンでは、キビナゴといった魚が取れてそれを喜ぶさまを表した島唄『谷茶目（たんちゃめ）』を彼女たちが歌い、踊るシーンが登場するので、それにも注目！さらに、本作導入部で沖縄師範学校の男子部が行進する時に歌うのは『元寇』だが、女子たちも軍歌である『轟沈』をしっとりと（？）歌いあげるので、それにも注目！もちろん、本作は「ひめゆりモノ」で、ミュージカルではないが、本作はこれらの曲をじっくり、かつしっとり聴かせるシーンが多いので、それはそれとしてしっかり楽しみたい。

■□■後半からはアブチラガマが舞台に！■□■

私は2019年11月17日～19日の沖縄旅行で、糸数アブチラガマを見学した。ア

ブとは深い縦の洞穴、チラとは崖、ガマとは洞窟のこと。つまり、沖縄戦ではこのアブチラガマ（自然の洞窟）が多くの民間人の避難場所になったわけだ。しかし、同時にそこは日本軍の作戦陣地や野戦病院にもなったから、米軍が沖縄島の南端に迫ってくる中、アブチラガマの中で軍人と同居することになった民間人たちの運命は悲惨なものになったのは当然だ。

他方、見学して私が意外に豪華だと思ったのは、旧海軍司令部壕。これは、1944年に持久戦続行の陣地として設置されたが、沖縄に日本の軍艦そのものがいなくなってしまいう中、沖縄の海軍司令本部は結局海軍としての機能を全く発揮できず、この壕は大田實司令官が自決するだけの場所になってしまった。

しかして、1943年夏の運動会では全員明るかった沖縄師範学校女子部の女学生たちも、「ひめゆり学徒隊」として出陣する後半からは苦難の連続となるうえ、彼女たちが働く舞台は、そのほとんどがアブチラガマの中になっていくことに。

■□■卒業式の感激は？水浴びの楽しさは？■□■

私の約30分間にわたる糸数アブチラガマの見学は、70年の生涯の中でも最大級の衝撃だった。だって、真つ暗な洞窟の中を懐中電灯1つだけで恐る恐る上り下りしながら見学（探検？）し、戻ってきたのだから。「滑らないように」と言われても、手すりのない滑りやすい足元では、最大級の注意を払っても何度かヤバかった。そして、要所要所でのガイドの説明は当時の悲惨な状況をリアルに語りかけるもので、それを聞いていると、アブチラガマの中は、うめき声や悪臭で溢れている感じになってくる。食べ物、飲み物がほとんどないのは当然だが、こんな狭い洞窟の中で手術をし、大小便をしていたと考えると……。そんな体験をただけに、本作後半に見る、洞窟の中での「ひめゆり学徒隊」の奮闘ぶりに思わず涙が……。

もっとも、本作にはいかにも日活映画らしい救い、明るさがある。それは第1に、校長先生（中村翫右衛門）や照喜名先生（二谷英明）が、生徒たちのために形ばかりとはいえ、開催してやる卒業式のシーン。もちろん、その総代は吉永小百合扮する和子だが、そこで歌われる『仰げば尊し』の価値は絶大なものだ。第2は、生徒たちが日本軍の一斉反攻が始まるとのデマの中、集団で水浴びを楽しむシーン。素っ裸になっていないものの、若い娘たちが下着姿になって水浴びをするシーンはいいものだ。しかし、その上空に飛来した飛行機は日本軍のもの？いやいや、そんなことはあり得ず、これは米軍機だったから、その直後に起きた悲劇は？大本営のデマを信じたばかりに、彼女たちは？そんな怒りと悲しみで、私の胸はいっぱいに……。

■□■青酸カリ入り牛乳は？手榴弾は？結末は？■□■

『日本のいちばん長い日』（67年）では、三船敏郎扮する阿南惟幾陸軍大臣の割腹自殺のシーンが見どころだったし、『硫黄島からの手紙』（06年）は渡辺謙扮する栗林忠道陸軍中将の自殺シーンが涙を誘った（『シネマ12』21頁）。また、私の沖縄旅行では、旧海軍司

司令部壕では大田實司令官が自殺し、平和祈念公園の奥にある第32軍司令部壕では牛島満司令官が自殺した場所を見学する中で、当時の彼らの気持ちに思いを致した。しかし、彼らは軍人でしかも司令官だから、最後に責任を取って自決するのは当然だが、米軍に追い詰められ日本軍の支援もなくなってしまった沖縄の民間人は、一体どうすればいいの？

そこで必要になったのが、青酸カリ入り牛乳であり自決用の手榴弾だが、当時それはどのように使われたの？本作は悲しい結末に向けて、その2つの小道具を使った悲しいストーリーが描かれるので、それに注目！その第1は、足に傷を負い動けなくなった和泉雅子扮するトミが、「私にもください」とおねだりをして受け取った青酸カリ入り牛乳を飲むシーン。第2は、本作ラストで、吉永小百合扮する和子が、残骸の中で最後まで生き残った級友と共に手榴弾を爆発させるシーンだ。これらのシーンは、ドキュメンタリー映画でも再三登場するものだが、当時の日活若手看板女優たる吉永小百合と和泉雅子が演じるこの悲しいシーンを、あなたは どう見て、どう考える？

2020（令和2）年1月27日記